

# 纏 向 遺 跡

—昭和56年度遺跡範囲確認発掘調査概報—

桜井市教育委員会

## 序

私達の桜井市に存在する纏向遺跡は、市の平垣地域の北部に位置し、巻向川によって形成された扇状地にあります。この遺跡では、古墳時代前期を中心に、縄文式時代後・晚期より平安・鎌倉時代に渡り人々が生活を営んできた足跡が残されています。この遺跡の中心となる時代は、大和に（特に本市にある箸墓を始め、茶臼山古墳やメスリ山古墳等）巨大な前方後円墳が築造されはじめた時代であります。このことは、この地方に強力な勢力をもつた集団が存在したことを物語っているのであります。又この遺跡は、この地に限らず畿内及び西部瀬戸内から、山陰、東海地方との交流があったことが、出土遺物からも推し量ることができます。このように纏向遺跡が古墳を築造しはじめる時代を知るうえで重要な遺跡であります。しかし、この地は原始の時代から人々が生活の基盤とした様に宅地には適した地域であるため徐々に宅地化が進み、その保護、究明が急務となりましたので、昭和54年度より国庫・県費補助を受け発掘調査を継続しております。発掘調査を実施するにあたりましては、土地所有者を始め地元の方々の御協力をいただきましたことを感謝いたします。

昭和57年3月

桜井市教育委員会

教育長 西 村 司

## 例　　言

- 1 本概要報告書は、昭和56年4月から昭和57年3月の間、昭和56年度国庫補助事業として、桜井市が事業主体となり桜井市教育委員会が実施した纏向遺跡内の発掘調査及び立会調査の概要である。
- 2 本概報には、主として卷之内 番地字ババサキ地区の調査資料を記した。他の地域の資料は未整理であるため記載できなかった。
- 3 調査において、土地所有者の方々をはじめ地元の方々の援助があった。
- 4 本年度実施した調査地区は6ヶ所であり内A・C・Fの3ヶ所で発掘調査を実施し、他は立会調査とした。
- 5 各調査の所在地番、調査期間はつぎのとおりである。

### A調査地区

- 大字卷之内410-1・2、411-1・2番地字ババサキ地区（辻 啓子氏所有水田、小西末治氏借用地）
- 昭和56年7月8日～9月30日

### B調査地区

- 大字卷之内366-2番地（北島 昇氏所有水田）

### C調査地区

- 大字東田269-1番地字ハシリ田地区
- 昭和57年1月20日～2月20日

### D調査地区

- 大字辻 消防用防火水槽用地
- 昭和57年2月1日

### E調査地区

- 大字東田 消防用防火水槽用地
- 昭和57年2月3日

### F調査地区

- 大字辻24番地他（旧纏向幼稚園跡地）
- 昭和57年1月25日～3月31日

## 調査関係者

### 調査指導

奈良県立橿原考古学研究所

### 事務局

桜井市教育委員会事務局

教育長 西村 司

教育次長 鳥岡 一郎

社会教育課長 石本喜代次

社会教育課 中西 貞夫

〃 萩原 儀征

〃 新屋敷啓順

〃 村社 仁史

### 調査員

文化財係長 技師 萩原儀征

文化財係 臨時職員 村社仁史

### 調査補助員

立命館大学学生 山田清朝、桜庭裕和、伊庭 功

桃山学院大学学生 狩田恭弘

神戸商大 羽田佳代

近大付高生徒 仲野和正

### 調査作業員

植田光雄、植西キヨ、北西利子、鷲岡道子、辻 綾子、辻 和子、中森義雄、藤本ミサオ、堀井基五郎、堀内和江、堀内安子

### 植物質遺物の調査

関西外語大学教授 鳥倉巳三郎

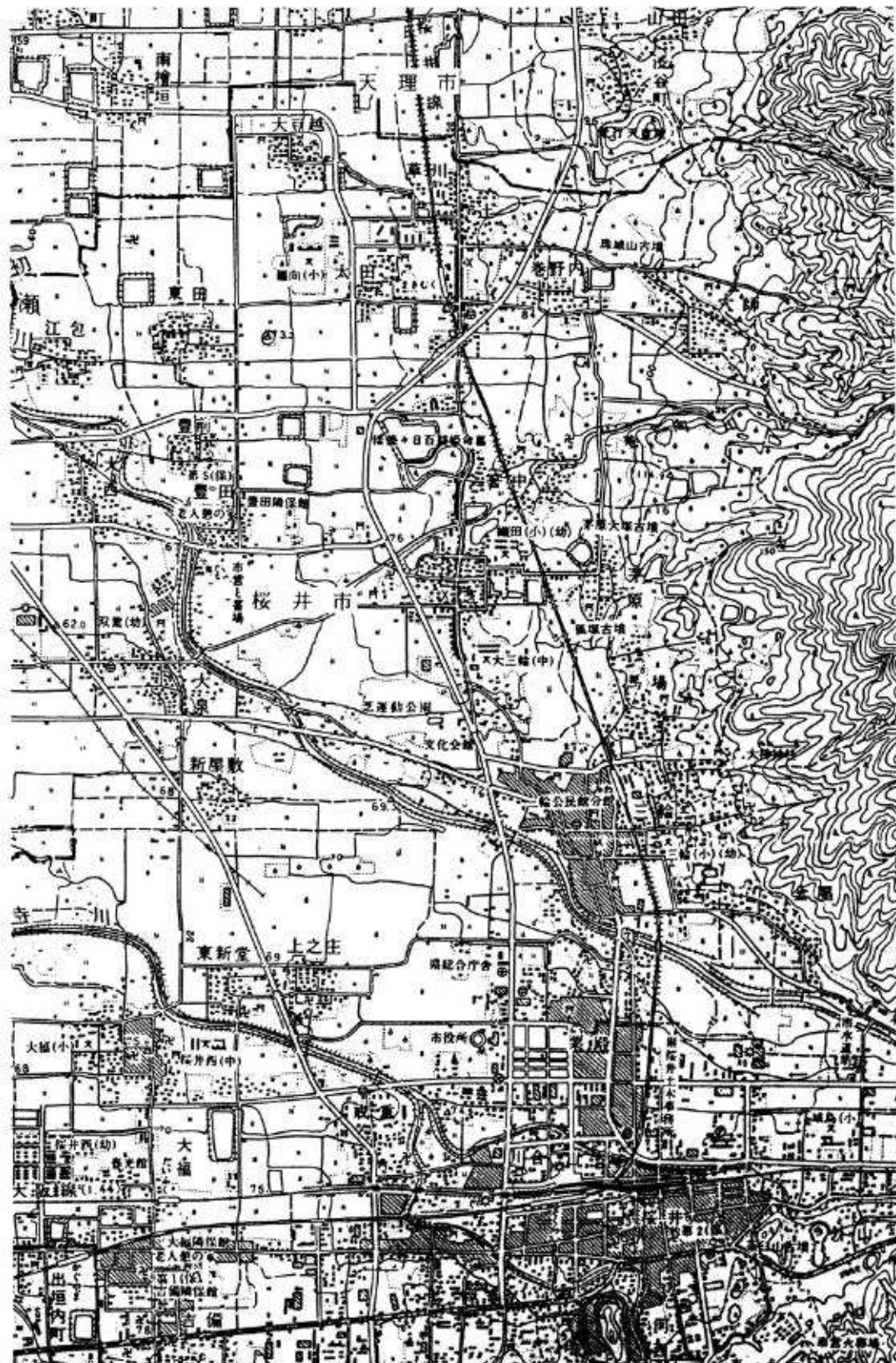


図1 S = 1/25000

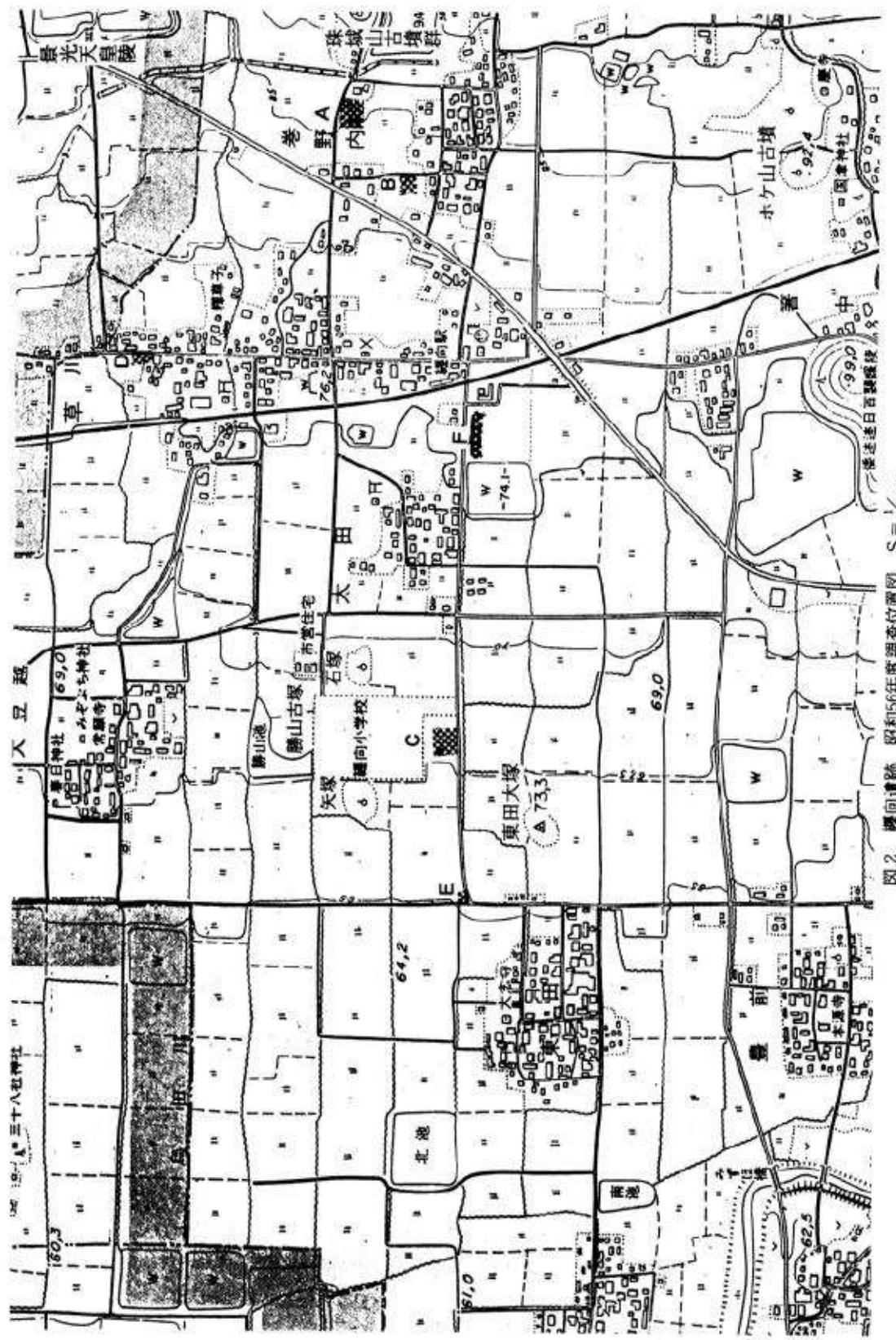


図2 燐向遺跡 昭和36年度調査位置図 S = 1/10000

## ババワキ地区

### I 環境

ババワキ地区の周辺には柳本古墳群の景行陵が、北約400mにあり、柳本古墳群南部に位置を占めている史跡珠城山古墳群は調査地区的東に近接している。又、調査地周辺は垂仁天皇の纏向珠城宮伝承地であり、市道を隔て北側にその伝承地を示す石碑が建立されている。そしてその約800m東方には景行天皇の纏向日代宮の伝承地として石碑が建てられている。これら伝承地の発掘調査は実施されていないが、遺物の散布は認められる。

近世においては、柳本藩の馬場と伝えられババワキとゆう小字名は、昭和55年度発掘調査した、A地域が同じ字ババワキであり、共に柳本藩の馬場近接地を意味するのであろう。

調査地域の地形は、史跡珠城山古墳群に続くが造営されている丘陵に続く、昭和55年度発掘調査したババワキ地区と同じ微高地の南傾斜面に立地する。この地域は南に広がる低地において河道跡を確認しているので旧河道北岸が考えられる。

### II 調査の概要

調査は東西方向に36m、幅5mのトレンチを設定し、必要に応じて拡張した。調査区画の設定は、南北方向をY軸とし、これに直交する東西方向をX軸とする。区画は方4mとし、区画名はY軸をアラビア数字で、X軸をアルファベットで表わした。呼称は、両軸の交点の東南方向の区画をその交点の名称を用いる。

例えば、大区画の西北角の小区画は、1 Aとなる。なお調査区域は12 I 北辺において、壺棺を検出したので北に約5.5m、東西に約15m拡張した。

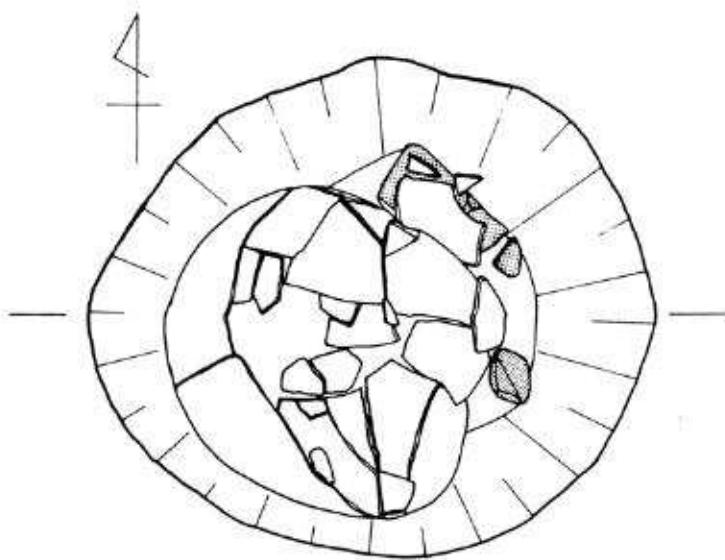
### III 遺構の概要

耕作土下に耕作に伴う中・近世以後の暗渠と考えられる小溝の掘削が地山上に達し、酸化鉄分を多く含む黒褐色のいわゆる含包層は小溝間に若干遺存するのみで、中・近世以後の削平が著しく行われていたと思われる。

検出した遺構は、約2mの溝幅をもつ南西方向に流れる溝1、壺棺を埋納した土壙1、長方形竪穴、井戸、土壙及び小穴である。なお、調査区西方向はゆるやかな傾斜を示し、黒褐色土層内及びその下は10cm~20cm大の礫が多く、下部は粘質を帯び、遺構を検出できなかったことから辻旧河道北岸部の河原と考えられる。

### 1 溝（図版2下）

14Jより13Kに流れる幅約2m、深さ約40cmの溝である。溝内堆積層は粗粒砂が主である。遺物は溝内より出土していないが、両岸部より縄文時代晚期の深鉢底部（土器図1-2）が出土しているが、溝に伴うものか不明である。



### 2 壺棺（図版3上・下）

12J西北角より長径約75cm短径約65cm、深さ約40cmの円形の土壤に壺棺（土器図2-3、図版16下）を埋納したもので、壺は土器肩部及び体部の一部を破壊し肩及び首部は棺を安定させる支えとして使用し、破壊した肩部及び体部の破片で蓋をしている。棺内堆積状況は、底部に粘土層がほぼ水平に堆積し、壺棺内が一時空間を保っていたことを示している。又、同層上面に土師器片（棺材片）が同層に接して落込

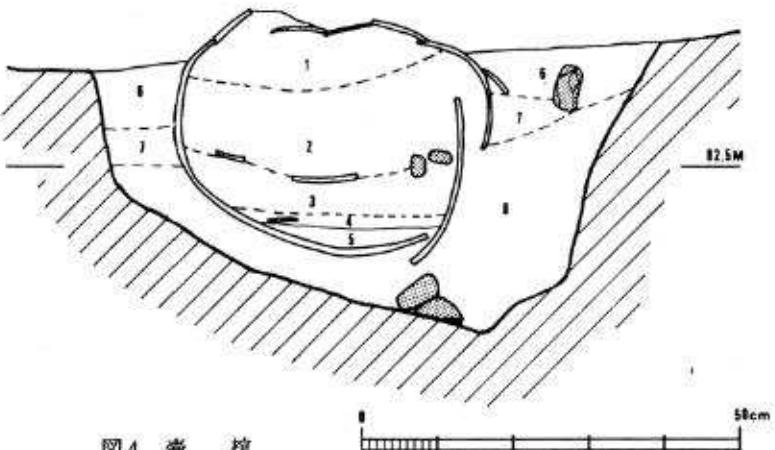


図4 壺棺

- 1 黒褐色土層I（少し砂質を含む）
  - 2 黒褐色土層II（1層より黄色を帯び若干明るい）
  - 3 黒褐色土層III（2層と同様であるが小礫を包含する）
  - 4 砂混り黒褐色土層
  - 5 暗灰色粘土層
  - 6 黒褐色砂質土層（棺内の堆積土より少し黄色を帯びた砂を多く含む）
  - 7 暗黒褐色砂質土層
  - 8 暗黒褐色砂質土層（少し粘質を含む）
- スクリントーンは石を示す。

み、又それ以上の堆積層内には水平に土器片が落込んでいるので、第5層が堆積した以後は第5層が堆積する時間より速い速度で堆積したものと思われる。副葬品は棺内及び棺外にも検出できず又、人骨等遺骸は検出できなかったが、これらの状況より埋葬施設としての壺棺として考えられる。埋葬された時期については、棺内堆積層内から須恵器壺体部の破片1点、土壤底部埋土内より蓋杯

身片（6世紀中葉）1点を検出しているが棺材である壺の時期とは一致しない。しかし棺材は破片を接合すればほぼ完形となることからこの時期まで遺存していたものを利用したものと考えられる。これらのことから埋葬時期は6世紀中葉以後と思われる。

### 3 土壙（図版4上・下）

検出面は淡黄褐色土上面である、中・近世以後の耕作等によって削平を受け掘開面はすでに除去されたのであろう。規模は長径約2.2m、短径約1.9m、東西方向に長い橢円形である。深さは約1.2m淡黄褐色土を掘抜き径10cmから20cm大の礫を含む砂礫土層を掘開しており湧水は現在もある。しかし土壙内の堆積土は黒褐色土が主であり、腐植土層及び粘土層等いわゆる井戸状遺構より出土する土層は確認できず又、土壙内には径10~20cm大の礫の投入が著しく短期間に埋められたと思われる。土壙内出土遺物は土師器及び須恵器（土器図番号4~17）が出土しているが最下層から土師器（土器図番号15~17）が投入された礫の間より出土しておりこの時期に埋められたと思われる。

### 4 長方形堅穴（図版5上・下）

長径約3.6m、短径約2.6m、ほぼ南北に長い長方形の平面形である。深さは約30cm、底部はほぼ平坦である。底部周縁部には排水溝は検出できず、床面は淡黄褐色土である。この層より数cm下は砂礫層である。堅穴内には柱穴は認められず周辺部に柱が建てられたものであろう。遺構内出土遺物は須恵器（土器図番号18~19）の他若干の土器小片であるが時期は、後に記述する井戸より古く、飛鳥時代より新しい時代が考えられる。

### 5 井戸（図版5下、6上・下）

この井戸は、一辺約1.7m、深さ約1.9m、平面形はほぼ方形に近く、井戸枠を施した井戸である。底部には井戸枠を止めたと思われる杭を四角に検出した。井戸枠は最下段を検出したが、軟弱な砂礫層を掘抜いており上部にも井戸枠は施こされていたと思われる。井戸内には人頭大の礫が多

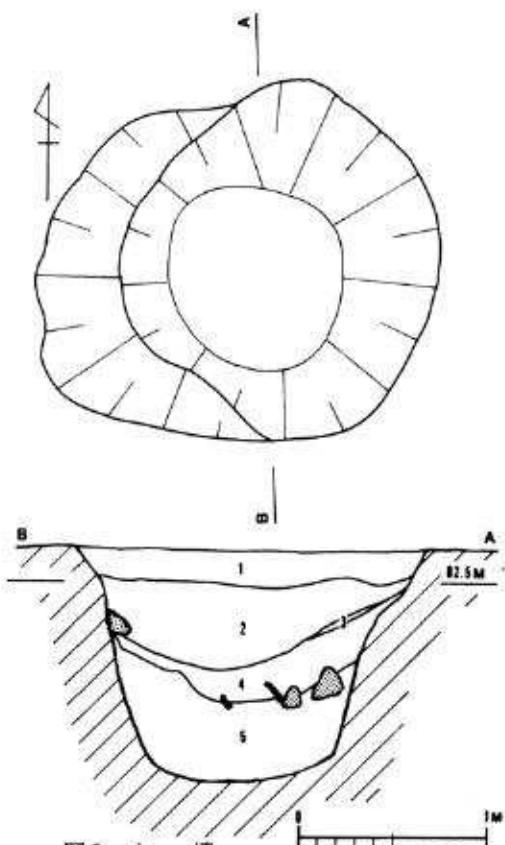


図5 土 壙  
 1 黒褐色土層  
 2 黒褐色粘質土層  
 3 淡黄褐色砂質土（地山土）混り黒褐色土層  
 4 砂礫混り黒褐色土層  
 5 砂礫土層  
 スクリーントーンは石を示す。

く投入されており井戸が放棄された時点で埋められたものであろう。出土遺物には黒色土器及び土師器（土器図番号20～32）が出土しており800年代末から900年代に埋められたものであろう。

#### 6 その他の遺構

調査地域内より柱穴状遺構を検出しているが、時期の明確な遺物、他の遺構との関連等明確なものは確認できず、その性格は不明である。なお、調査地区西及び東はゆるやかに傾斜し、耕作土層下は黒褐色土と共に礫が多量に出土し、この地域の現地形が南及び西方向に傾斜し、低地が穴師の集落方向から北西方向、現在の県営住宅の北側へ続いていることから辻旧河道の北岸部に形成された河原が考えられる。河原部より出土した遺物は土師器・須恵器（土器図番号33～41）等奈良時代の遺物を包み、辻旧河道の北辺を流れる奈良時代流路の延長部と思われる。又、包含層から径約4～7cmの小片ではあるが鉛滓片が20～30点採集しているが調査地域内で火を多用した痕跡は検出できなかった。

この地域の遺構が遺存している基盤となっている淡黄褐色土層下は礫を含んだ粗い砂層である。この層から縄文時代晚期の深鉢（土器図番号1）を検出しており、奈良時代流路は縄文時代晚期の流路と複合していることが考えられる。

#### 小 結

この地で検出した遺構は古墳時代後期から平安時代の時期である。

辻旧河道北岸に位置し、河道北辺を流れる奈良時代の流路に近接している。地形は北東方向にゆるやかな傾斜をもって高くなっている。

包含層から鉛滓片を検出しているが火を多用した痕跡は検出できなかった。しかし大字穴師の宮生氏より穴師の集落東方にヒムロと云う地名があることを教えていただいた。森浩一氏より古代の鍛冶屋は小規模な精錬を行ったらしく、小量の鉛滓を伴う可能性があるとの御教示を受け、このことは今後の調査をまたなければならない。

この地域に推定されている垂仁天皇の纏向珠城宮であるが、これらのことから調査地域においては確認できず、地形が北へゆるやかな傾斜をもって高くなっているのでその可能性は残っている。

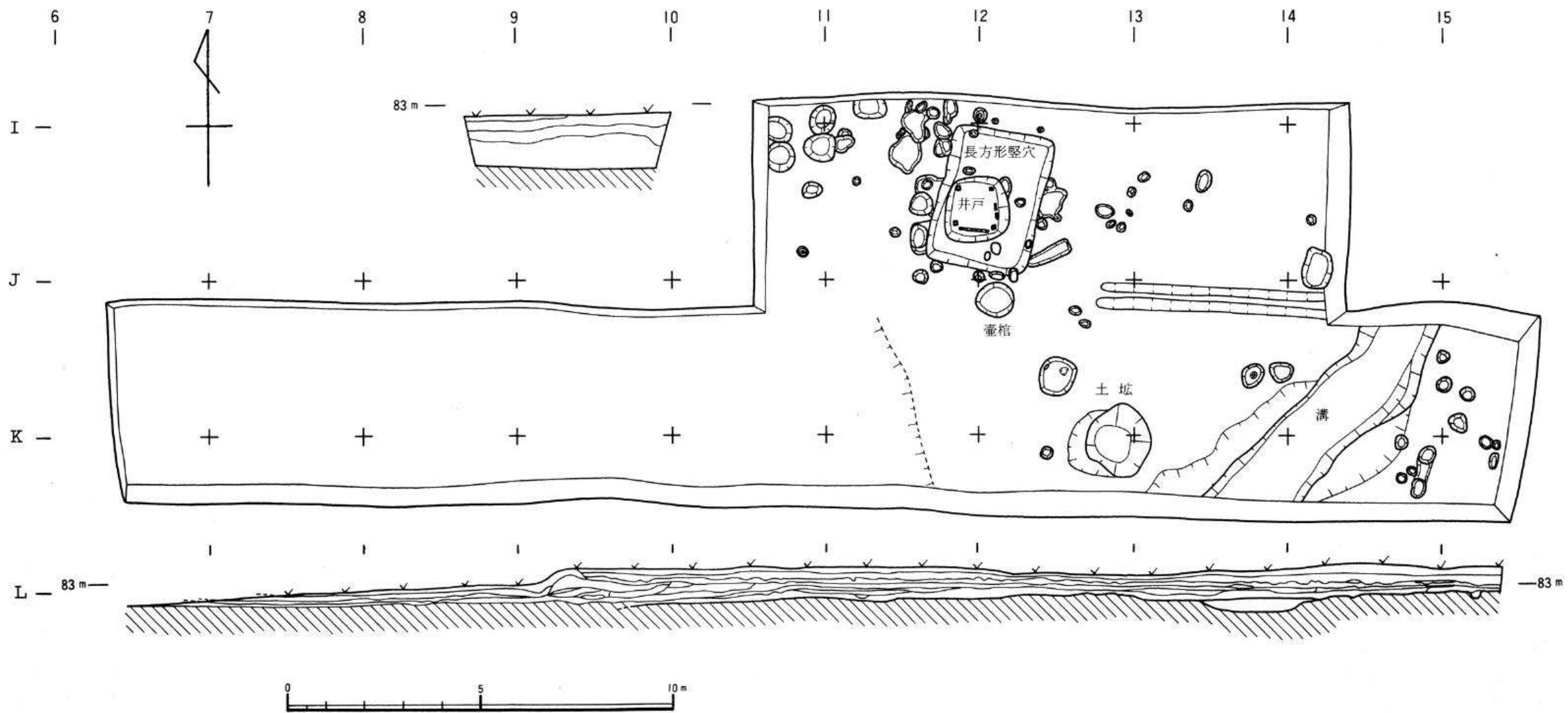


図3 ナバワキ地区

## ハシリ田地区(図6、図版7上・下)

### I 調査の概要

この地は昭和54年度発掘調査した村島氏所有水田の東に接し、樋原考古学研究所によって昭和46年より47年に渡り発掘調査した東田地区の大区画7Dの地域に該当する。この地域は古墳時代前期においても古い時期の遺構が多く、南溝及び北溝に挟まれた地域である。

調査の起因はこの地にテニスコートを設営する目的で農地転用届が提出されたことによる。工法は盛土によるもので遺存していると思われる地下遺構への影響を最少限に止める可能性があるので調査は、遺構の遺存状況を把握するに必要なトレンチ調査とした。トレンチは、南北方向に長さ36m、幅4m、東西方向に長さ26m、幅4m、L字形に直交するトレンチを設定したび

### II 遺構の概要

この地域での基本的な層序は、上層より耕作土、床土、黒褐色土の4層があり、その下に黄褐色粘質土層(基盤)となる。遺構は床土層下部及び下より中・近世より現代に渡り繰り返し設定された暗渠痕と思われる幅15~20cmの細い溝が東西及び南北方向に不規則に並び、その傾向は南北方向が比較的多く、この地域が東より西へ延びる微高地の南側傾斜地に位置することによるものであろう。この暗渠検出面以下に古墳時代前期遺構を検出することができる。古墳時代前期の遺構は、東より西方向に流れる溝4条、土壤1、柱穴等である。

溝は、ほぼ東より西方向へ流れ、溝内堆積土よりゆるやかな流路であったと思われる。

調査地区内南部の溝は(図版7、図版8上)幅約3.6mの溝であるが流路移動により拡張されたと思われる。この溝が掘削使用された時期は、溝底部より第三層以下の層より縦向三式期の土器(庄内式)を検出しており、この時期に掘開され、第三層より縦向四式(布留式)の土器が含まれているので、この時期には埋没したものと思われる。

土壤は5E区画において検出した。検出面は淡黄褐色粘質土層(地山)上面であり削平を受けていると思われるが、その規模は径約2.8m、深さ約1.2m、礫混り粗砂層を約40cm掘開しており湧水は豊かであったと思われる。

土壤内堆積土は、黒色粘土層が底部より約60cmの厚さで堆積し、その上に周縁部からの流入土が堆積している。土壤内に粘土層が厚く堆積していることは開口期間が短期間には埋没していないことを推測できる。この土壤の開口期及び埋没期は溝とほぼ同時期と思われ、底部より縦向三式期、粘土層上の堆積土より縦向四式期が出土している。

### 小 結

この地における遺構は縦向三式期を主とする遺構群であり、縦向四式期以後に埋没したと思われ

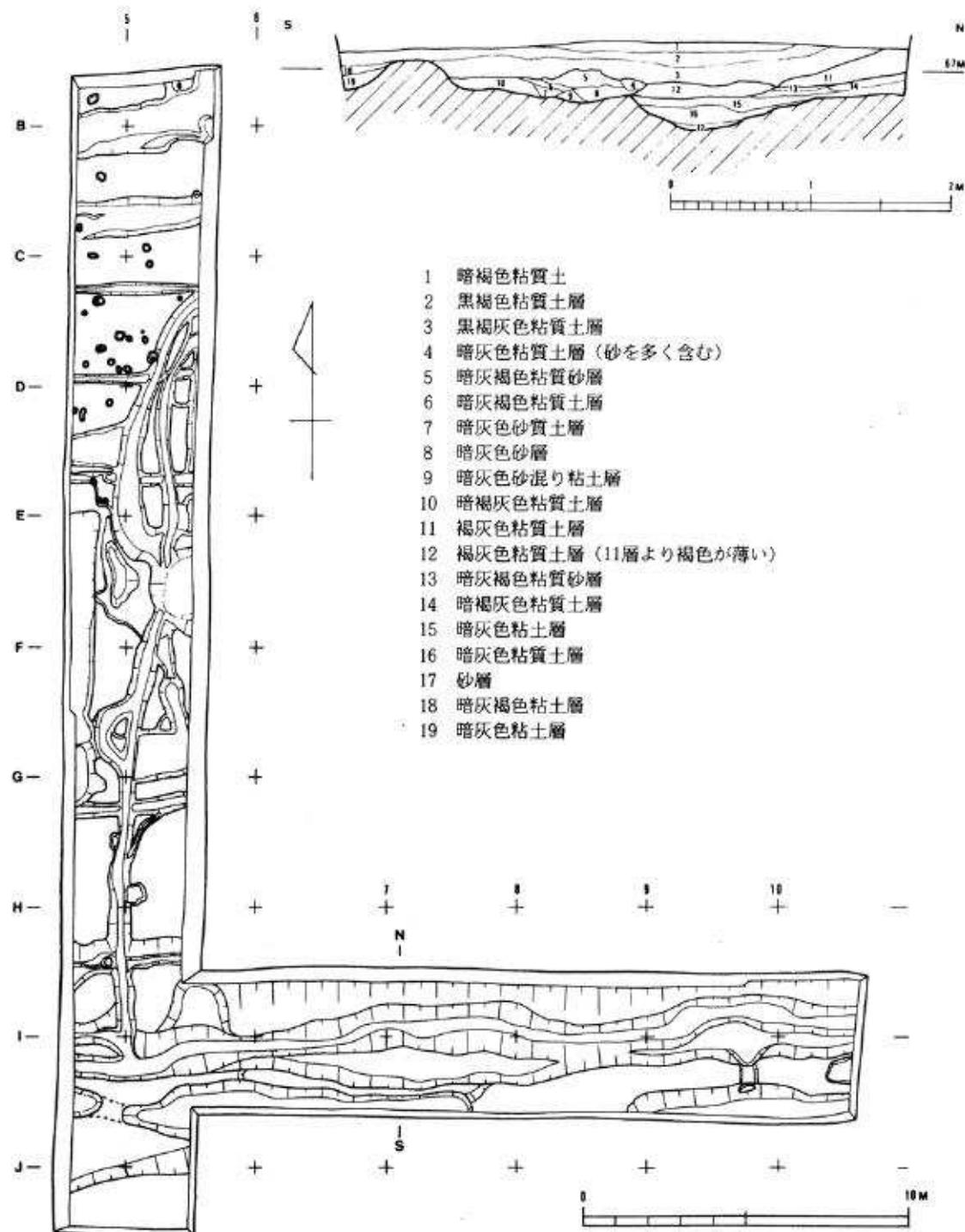


図6 ハシリ田地区遺構図

る。

溝の流れは溝内堆積層は主として粘土又は粘質土が堆積し、流れが緩やかであったことを示しており、流路延長上にある昭和54年度の調査で検出した溝は砂が主として堆積しているので同一溝でない可能性もある。

### その他の調査地区

纏向幼稚園跡地の調査を昭和57年2月より3月31日の間に発掘調査した。この地は旧纏向小学校用地に接している。

調査は幅4m、長さ約65mのトレンチを東西方向に設定し古墳時代前期の溝・土壌等を検出し、この地全域に遺構が遺存していることを確認した。今後この地について保存を含めて検討しなければならないであろう。この他、立会調査の結果よりB調査地点では辻旧河道と思われる砂礫層を確認し、辻旧河道はA調査地結果と合せ考えてかなり広い河幅であったと思われる。D調査地においては遺構・遺物は確認できなかったが、小範囲の調査の為纏向遺跡の範囲を確認する資料としては不充分である。E調査地においては、基盤となっている淡黄褐色粘土層及びその上に薄く黒褐色土が堆積しているのを確認したので、纏向遺跡の範囲は西へ広がると考えられる。

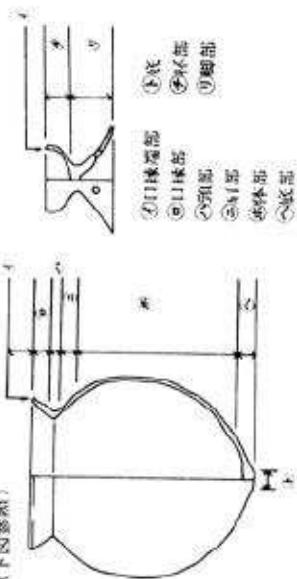
### 3 遺物の概要

表1 土器個体説明

註1 形態・法量は省略した。実測図によられたい。番号は実測図と一致している。図版にあるものは、その他の項に図版番号を記した。

註2 色調は主として「新版標準土色軸」によった。用語は原則として「繩向」に準拠したが、「版ナデ」については、板の木口によるものといわゆる「あらい刷毛目」を含みそれ以外は「刷毛目」とし、「竈ナデ」については「竈ミガキ」より器面に加える圧力が弱く表面がナメラカなものを言う。「砂粒」については径1mmを越える砂粒については、「粗砂」又は「粗粒砂」とし、越えないものは「細砂」とした。

土器各部の名称について  
(下図参照)



註3 形態・法量は省略した。実測図によられたい。番号は実測図と一致している。図版に

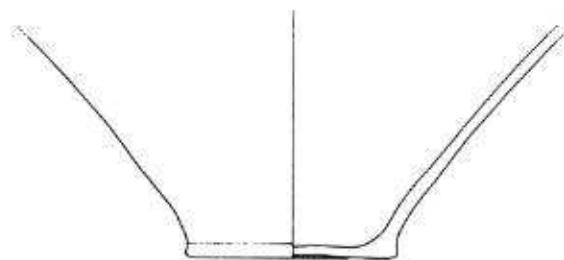
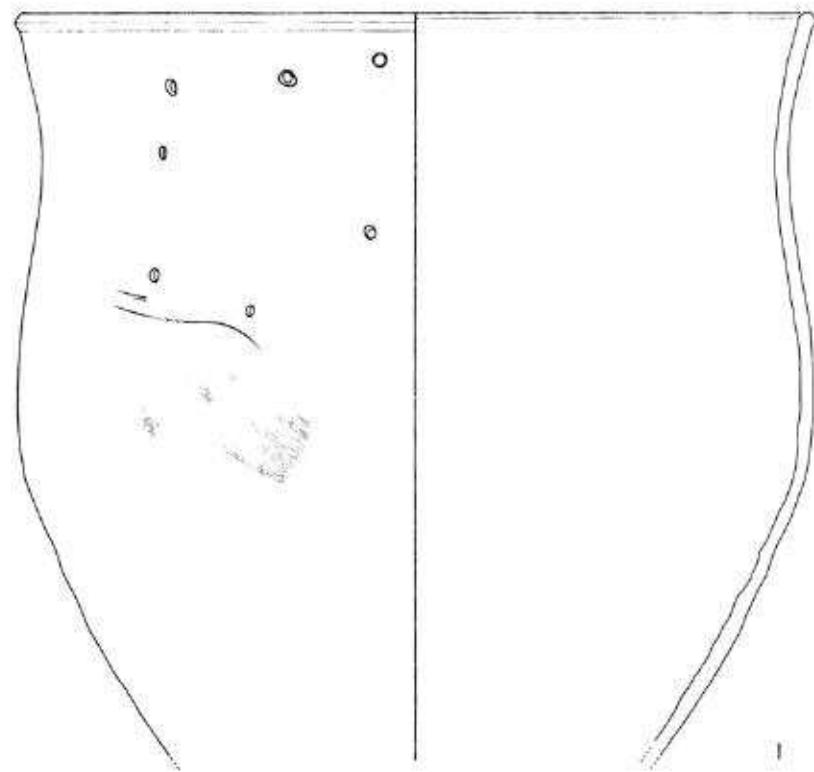
土 器 觀 察 表

番号	器種	手					法	色	調	胎	土	そ の 他
		口	縁	部	体	部						
1	深鉢	外面・内面及び端部竈状の物に あるナデ	胸部の最大径部より上は、竈状 のものによるナデ。以下は相成 孔は内側より開ける	首部以上は竈状のものによるナ デ。以下は相成孔は内側より開 ける	赤褐色に近い にぶい赤褐色	5mm以下の粗粒 砂(石英)及び金 雲母片混入						
2	深鉢		底部外面はナデ	底部内面ナデ	赤褐色に近い にぶい赤褐色	4mm以下の粗粒 砂及び金雲母片 混入						
3	壺 土器	端部外面及び内面は櫛描波状文 を加え、外面に竹管文を付した 円形厚文を等間隔に付加する	燒磨き後肩部に櫛描波状文を施 こす。	首部鑿磨き	5mm以下の粗粒 砂及び金雲母片 混入							
4	杯 須恵器	内・外縁ナデ	体部横ナデ、底部鰐ケズリ	横ナデ	灰	3mm以下の粗粒 砂混入						
5	杯 須恵器		底部横ナデ、高台貼付	底部ナデ	灰	粗砂混入						

6	杯 須恵器	内・外面横ナデ	横ナデ、底部は切り、底部周縁は回転ナデ、高台貼り付け	横ナデ	灰 粗粒砂を若干含む	焼成良好 径は反転後元
7	杯 須恵器	内・外面横ナデ	横ナデ、底部強ケズリ	横ナデ	灰 粗粒砂を若干含む	焼成良 径は反転後元
8	蓋 須恵器	内・外面横ナデ	強ケズリ後、口縁部周縁は横ナデ	回転ナデ	淡青灰 細砂を少し含む	焼成良好 径は反転後元
9	蓋 須恵器	内・外面横ナデ	強ケズリ後、口縁部周縁は横ナデ	横ナデ	淡青灰 砂を少量含む	焼成良好 径は反転後元
10	杯B 盖 土師器		強磨き後、滴みを貼付けナデを施こす	ナデ	檻灰 砂を少量含む	焼成良好
11	杯B 盖 土師器		横ナデ、外面横ナデ後、強磨き	ナデ	明金色 金雲母を若干含む	焼成良好 径は反転後元
12	杯 A 土師器	横ナデ	横ナデ	横ナデ	赤褐 細砂を含む	焼成良好 径は反転後元
13	杯 A 土師器	横ナデ	成形時の凹凸を残す	横ナデ後、暗文	檻 砂程り	焼成良好 径は反転後元
14	杯 B 土師器	内面横ナデ、外面強けずき	強磨き、底部横ナデ後、高台を貼付け、その周辺を横ナデ	上・下2段に横ナデ後、螺旋状暗文 底部ナデ後、螺旋状暗文	明銀	焼成良好
15	皿 土師器	横ナデ	横ナデ、底部成形時の凹凸を残す	横ナデ、暗文、底部螺旋状暗文	赤褐 11mm以下の小石 粗粒砂 金雲母微 量含む	焼成良好
16	壺 A 土師器	内・外面横ナデ	縦方向荒い刷毛目、2次加熱による変色有	成形時の凹凸が残り、その上にナデ	灰壁 10mm以下の粗粒 砂を含む	焼成良好
17	壺 B 土師器	内・外面横ナデ	荒い刷毛目、肩部荒い刷毛目後 横ナデ、把部貼付	成形時の凹凸が強く残り、若干 のナデが認められる	檻 粗粒砂・金雲母 混入	焼成良好

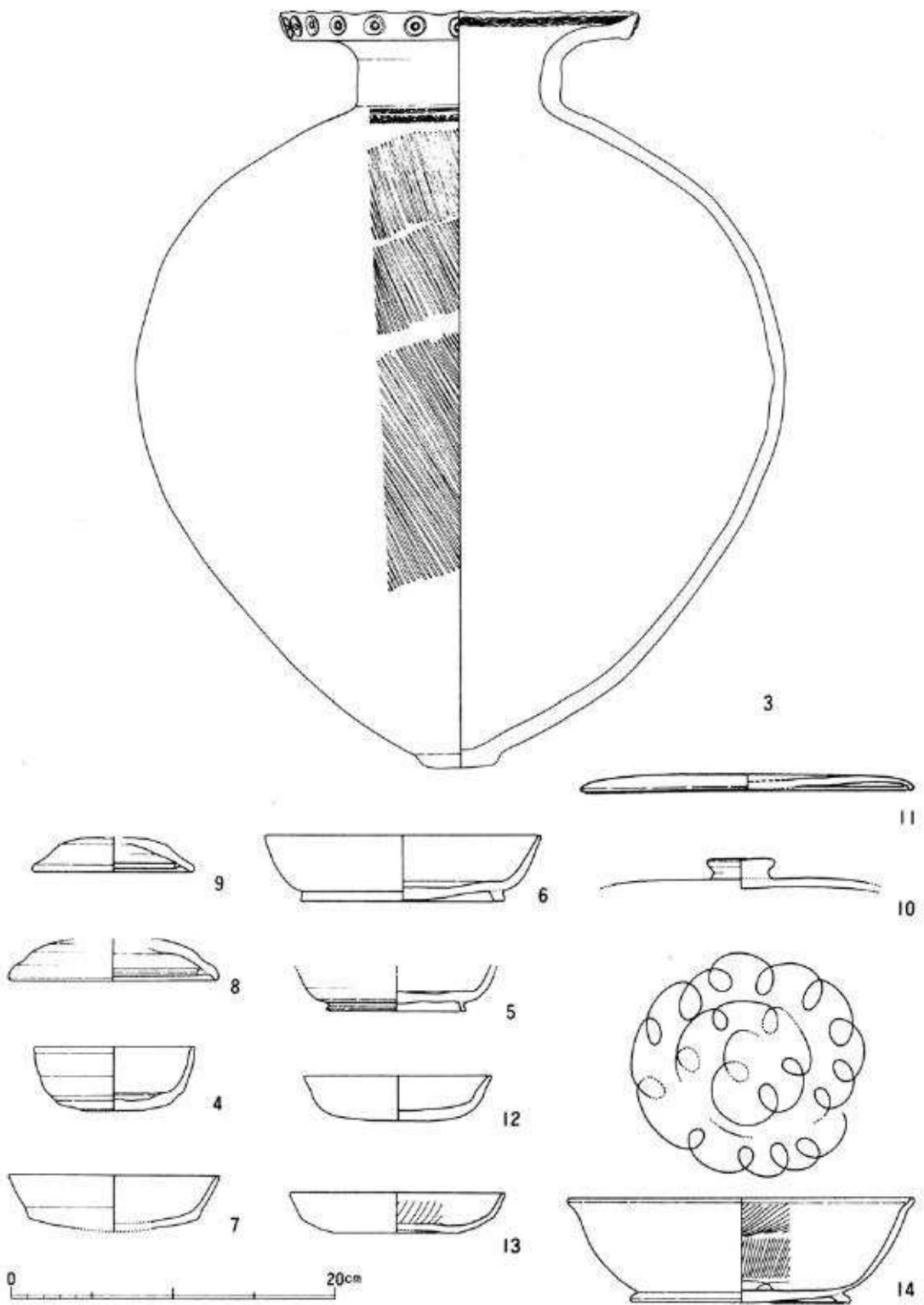
番号	器種	手			法			色調	胎	土	その他の
		口	縁	部	体	部	外				
18	蓋須器	内・外面横ナデ	縁ケズリ		回転ナデ			明褐色	粗粒砂少量含む	焼成良好 径は反転復元	
19	杯 身須器	内・外面横ナデ	蓋受部串ナデ	上部縁ケズリ後縁ナデ、下部及び底部縁ケズリ	回転ナデ			明褐色	妙混り	焼成良好	
20	杯 A 土師器	内・外面横ナデ		横ナデ、底部成形時の凹凸が残る	横ナデ、底部ナデ後、暗文			橙	きめ細く、雲母の 細片を若干含む	焼成良好	
21	杯 A 土師器	内・外面横ナデ		横ナデ、より底部は成形時の 凹凸が残る	横ナデ			橙	妙少なく雲母含 む	焼成良好 ヒズミが著しい	
22	皿 土師器	内・外面横ナデ		横ナデ、底部窪ケズリ	横ナデ、暗文			橙灰	細砂若干含む	焼成良好	
23	杯 A 土師器							明褐色	粗粒砂若干含む	焼成良好 径は反転復元	
24	碗 黒色土器	内・外面横ナデ	縁ミガキ		横ナデ			橙	細砂少量含む	焼成良好 径は反転復元	
25	盤 B <sub>3</sub> 土師器	内・外面横ナデ		脚部以上機ナデ、脚部以下兔 方ナキ、タガ部貼付、タガ以下ス ス付着	成形時の凹凸が残る			暗褐色	5mm以下の粗粒 砂混入	焼成良好 径は反転復元	
26	钵 土師器	内・外面横ナデ、端部内側に まりげる		縁ナデ、スス付着	成形時の凹凸残る。若干ス付 着			ややにぶい、 赤褐	粗粒砂・云母含 む	焼成良好 径は反転復元	
27	杯 C 黒色土器	内・外面横ナデ			暗文状窪ナデ			橙	細砂を少し含む	焼成良好 径は反転復元	
28	钵 黒色土器	内・外面横ナデ、端部串状の物 によるナデ			横方向窪ミガキ、底部機ナデ			橙	細砂少量含む	焼成良好 径は反転復元	
29	杯 黒色土器	横ナデ?			成形時の凹凸残る。高台貼付部 横ナデ?			橙	細砂若干含む	焼成良	

30	杯 黒色土器	内・外面横ナデ	或形時の凹凸残る。底部及び高台貼付部回転ナデ	暗文状の横方向窓：ガキ	淡黄褐色	粗粒砂・雲母を含む	焼成良好
31	杯 黒色土器	内・外面横ナデ、端部内側押えによる凹凸	或形時の凹凸残る。底部及び高台貼付部回転ナデ	暗文状の窓：ミガキ	淡灰褐色	砂を少量化	焼成良好
32	杯 黒色土器	内・外面横ナデ、先端部つまみ	横方向ナデ、高台貼付、底部或形時の凹凸残る。	横方向の暗文	淡褐色	金雲母を多く含む	焼成良好
33	甕 土師器	内・外面横ナデ	板ナデ、底部ナデ	上部凹ヶ入り、底部ナデ	外表面、内面にぶい縦	粗砂・雲母多く含む	焼成良好
34	杯 土師器	内・外面横ナデ	或形時の凹凸残る	ナデ	燒	細砂・云母若干 混入	焼成良好 僅は反転復元
35	皿 土師器	内・外面横ナデ	横ナデ、底部成形時の凹凸残る	ナデ後暗文、底部成形時の凹凸 残る。ナデ後、半円形の暗文	赤褐色	粗粒砂混入	焼成良好
36	椀 須恵器	内・外面横ナデ	横ナデ後、文様を施し把手を接続させる。底部は窓ヶ入りを残す。把手は欠落。なお凹縫は横ナデ調整前である。	横ナデ	灰	細砂若干混入	焼成良好
37	蓋 須恵器	内・外面横ナデ	横ナデ	横ナデ	灰		焼成良好 僅は反転復元
38	杯 須恵器	内・外面横ナデ	横ナデ、高台横ナデ、端部窓ナデ、底部窓ヶ入り	横ナデ、底部回転ナデ	青灰		焼成良好
39	杯 須恵器	内・外面横ナデ	横ナデ、高台貼付後横ナデ、底部ナデ	横ナデ	淡青灰	粗粒砂少し含む	焼成良好 僅は反転復元
40	杯 須恵器	内・外面横ナデ	横ナデ、高台貼付後横ナデ	横ナデ	灰白	粗粒砂混入	焼成良好 僅は反転復元
41	杯 土師器	内・外面ナデ	高台貼付後ナデ、底部粘土ヒモ痕残る	ナデ	明赤灰	砂・雲母若干混入	焼成良好 僅は反転復元
42	杯 瓦	端部内側窓丸押え	暗文	成形時の凹凸が残り、その上に 暗文を施す	黒		焼成良好 僅は反転復元

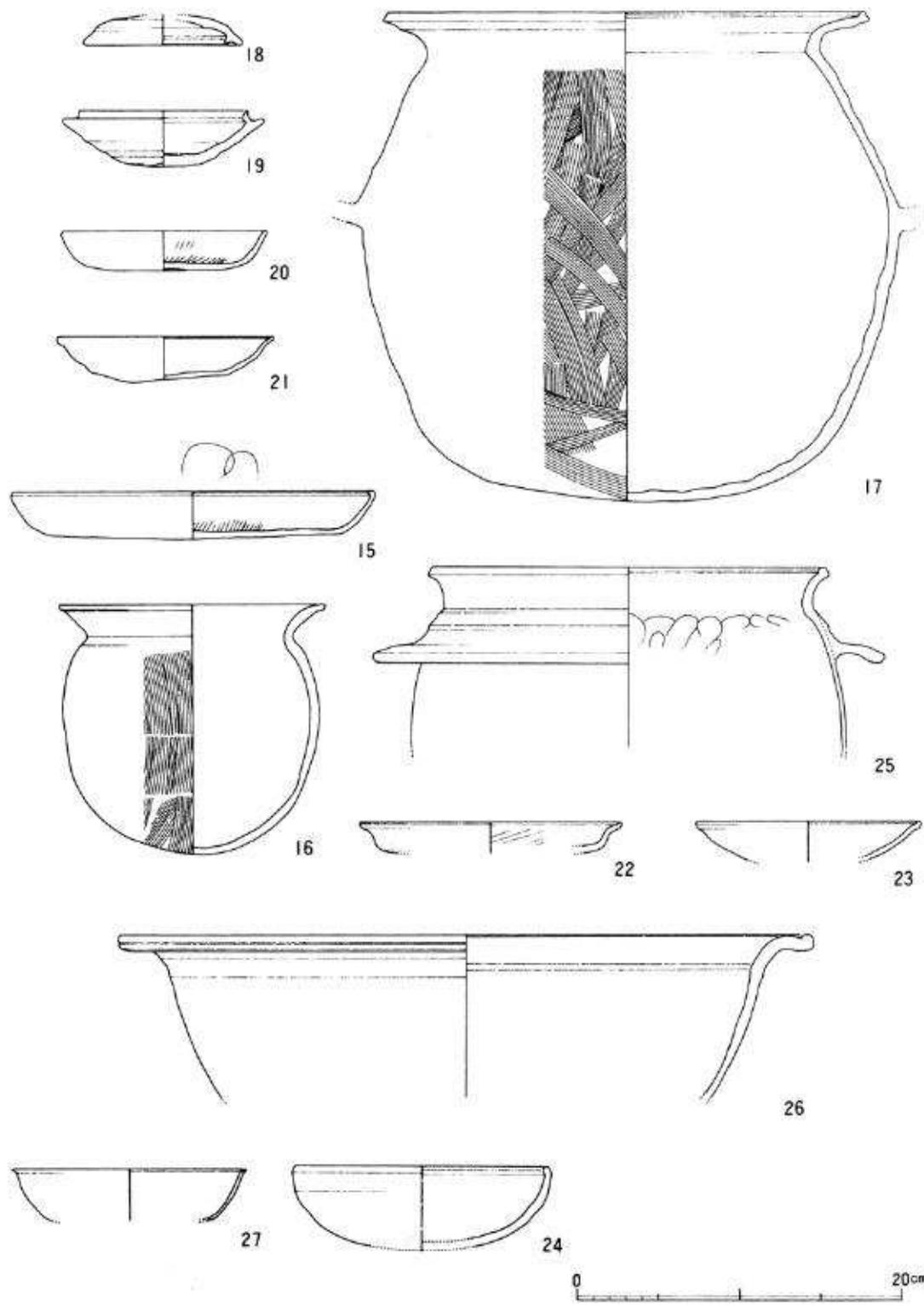


0 10 20 cm

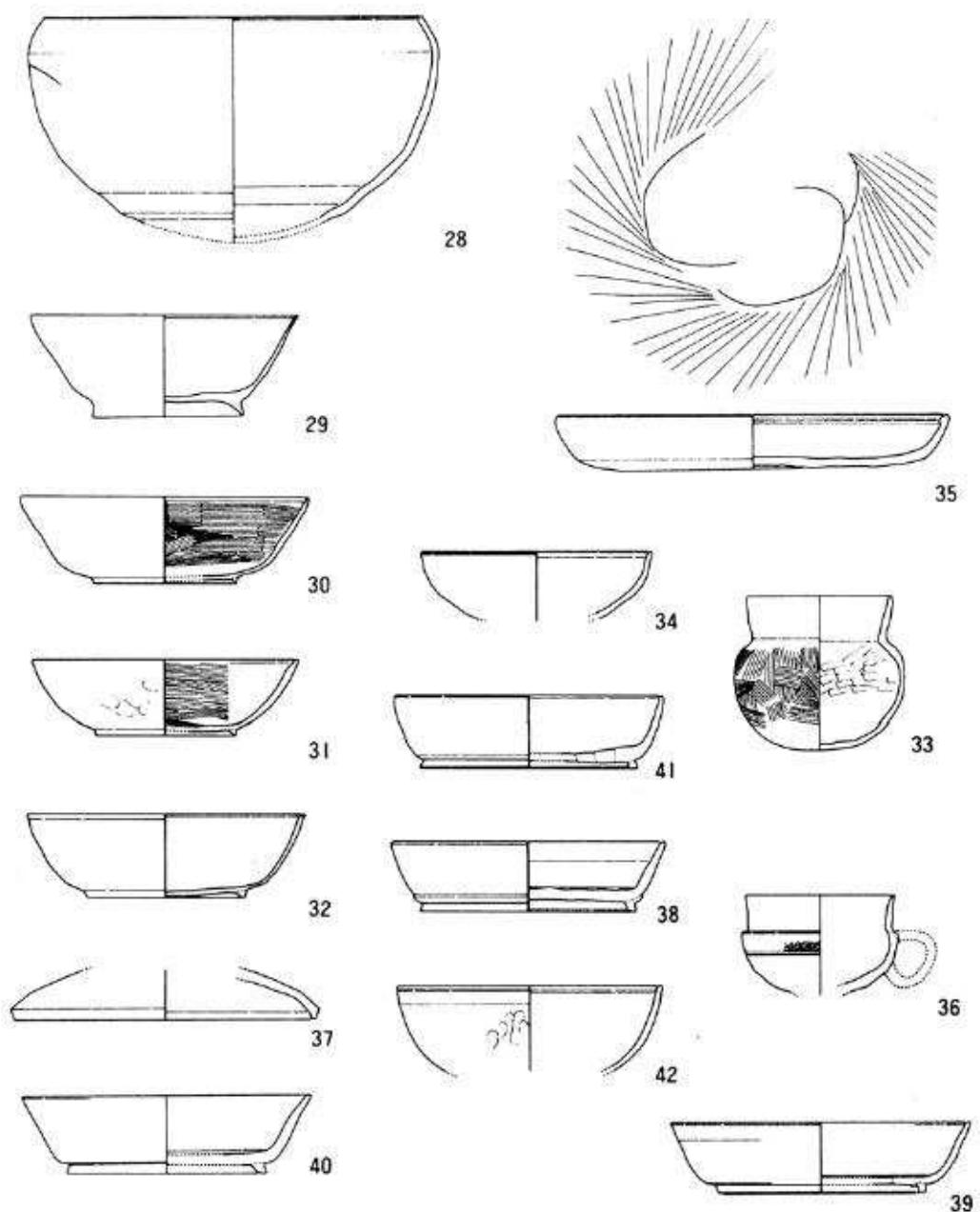
土器図 1



土器図. 2



土器図 3



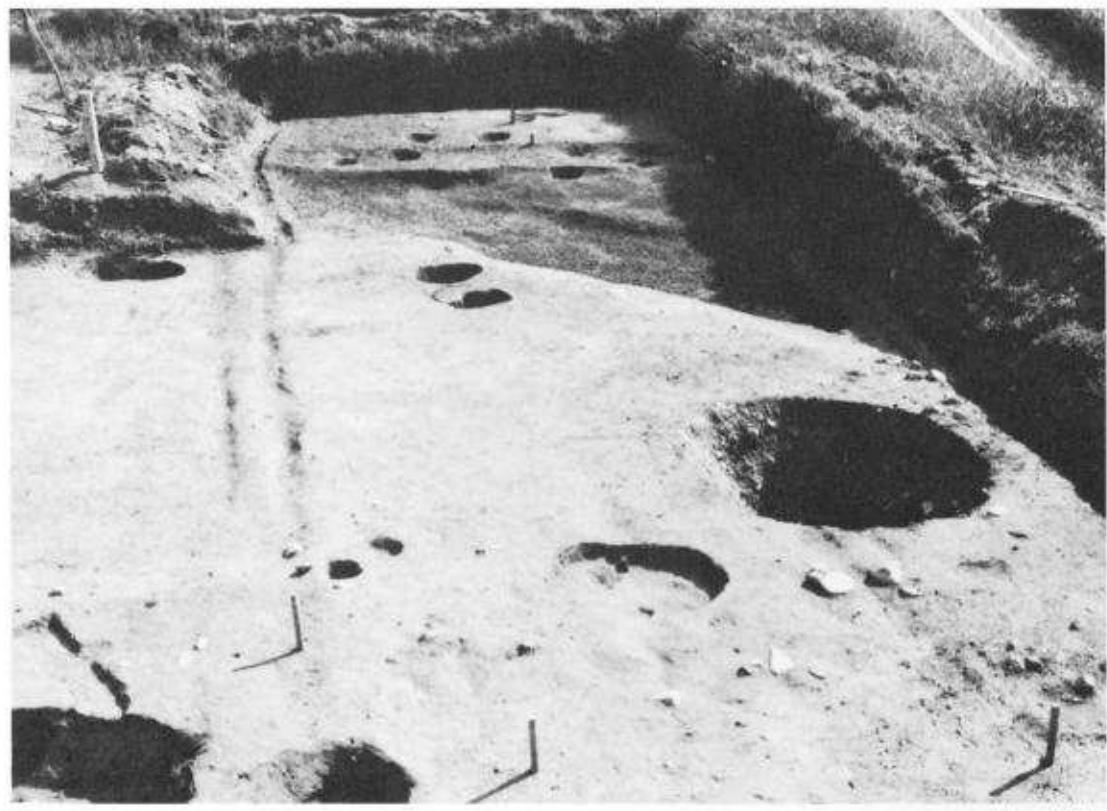
0 20cm

土器図 4

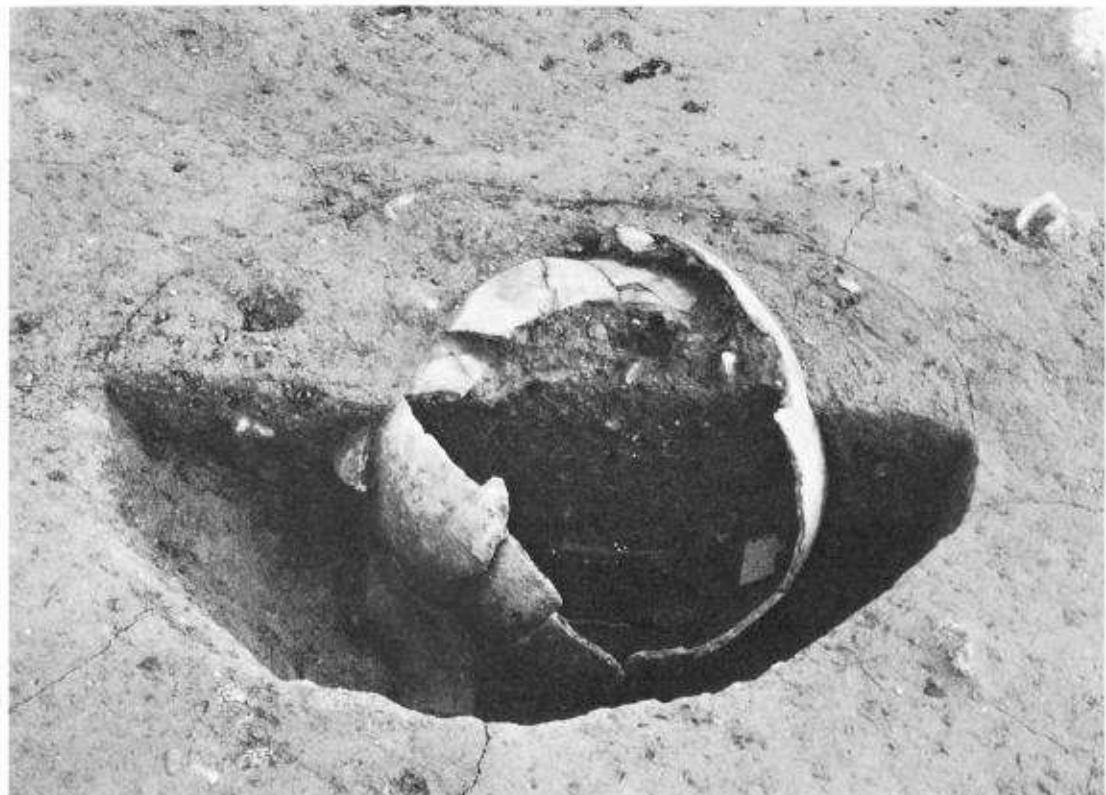




西より



溝・土壤



墓棺



同上墓墳



土壤內土層堆積狀態



同上遺物出土狀態



長方形窓穴及び井戸



同上



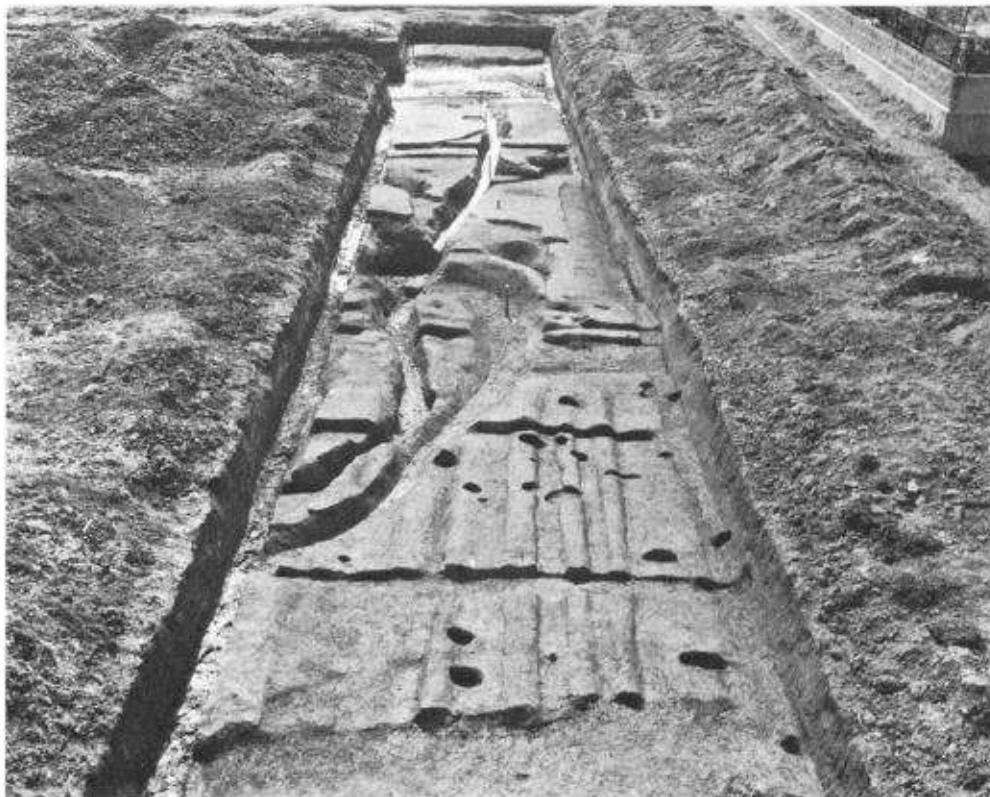
井戸底部井戸枠遺存状態



井戸埋土内遺物出土状態



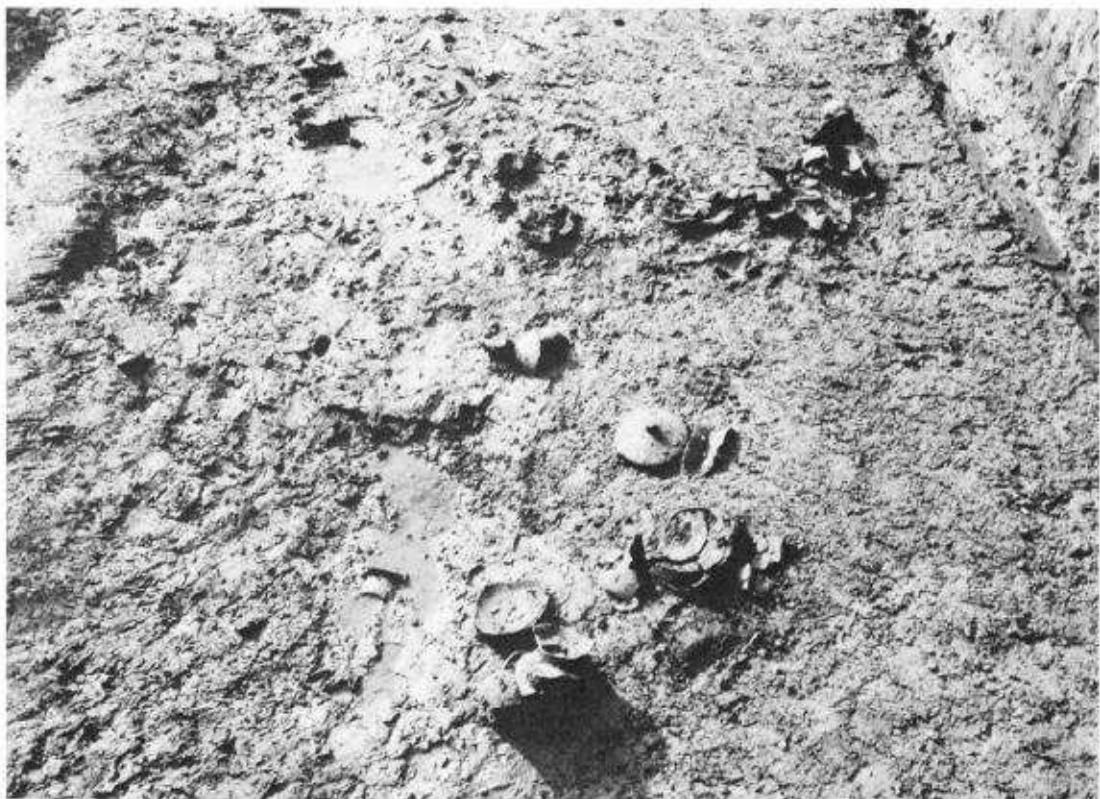
南北トレンチ（南より）



南北トレンチ（北より）



東西トレンチ（西より）



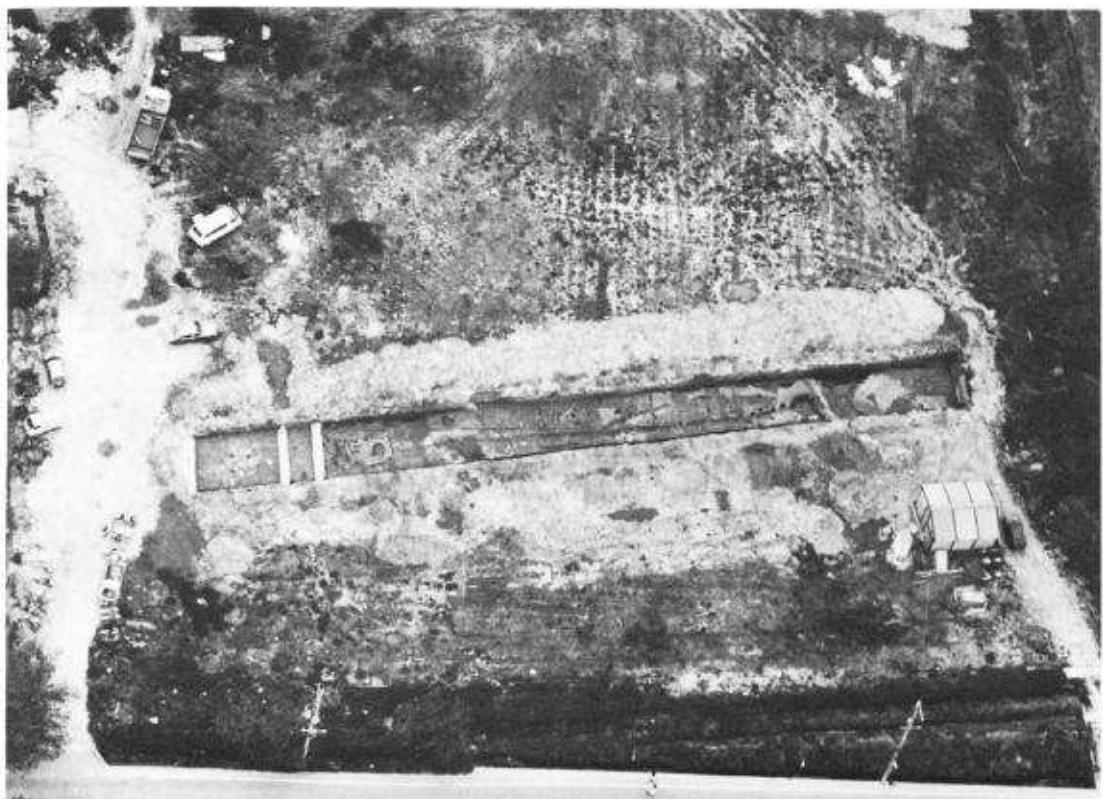
溝埋没後遺物出土状態



銅鐵出土状態



溝底部土器出土状態



東西トレンチ航空写真



西より



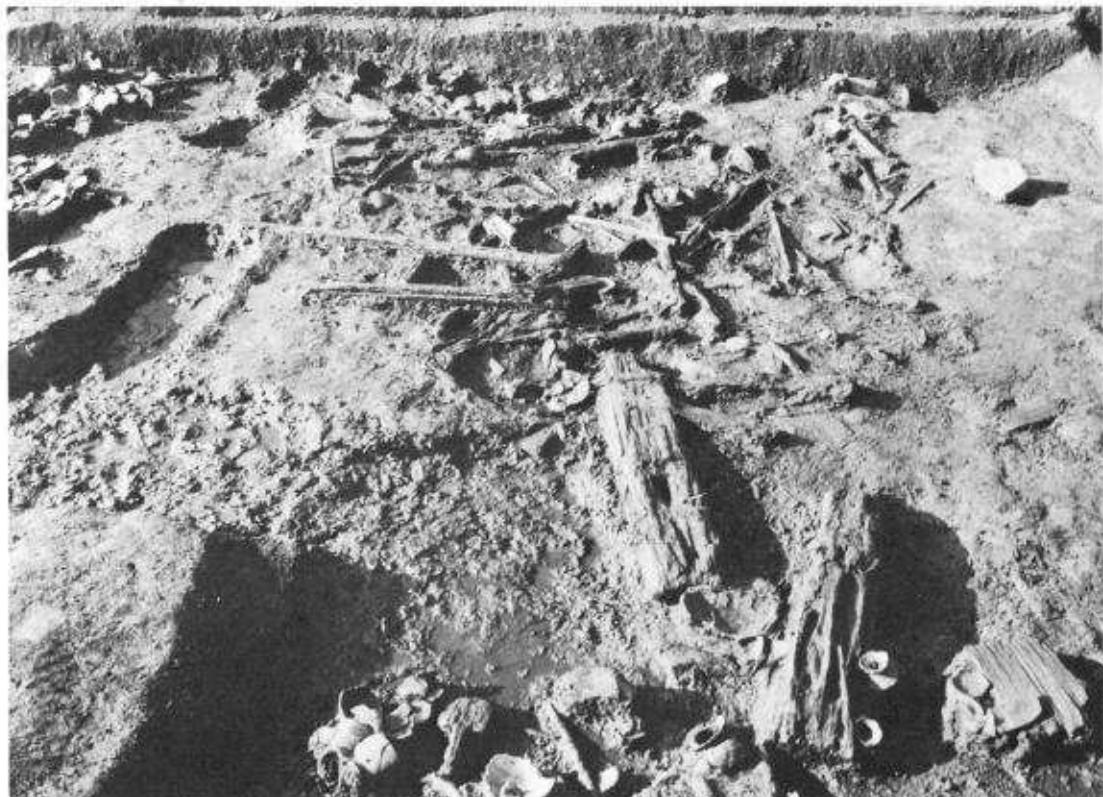
東より



溝及び凹地遺物出土状態（北より）

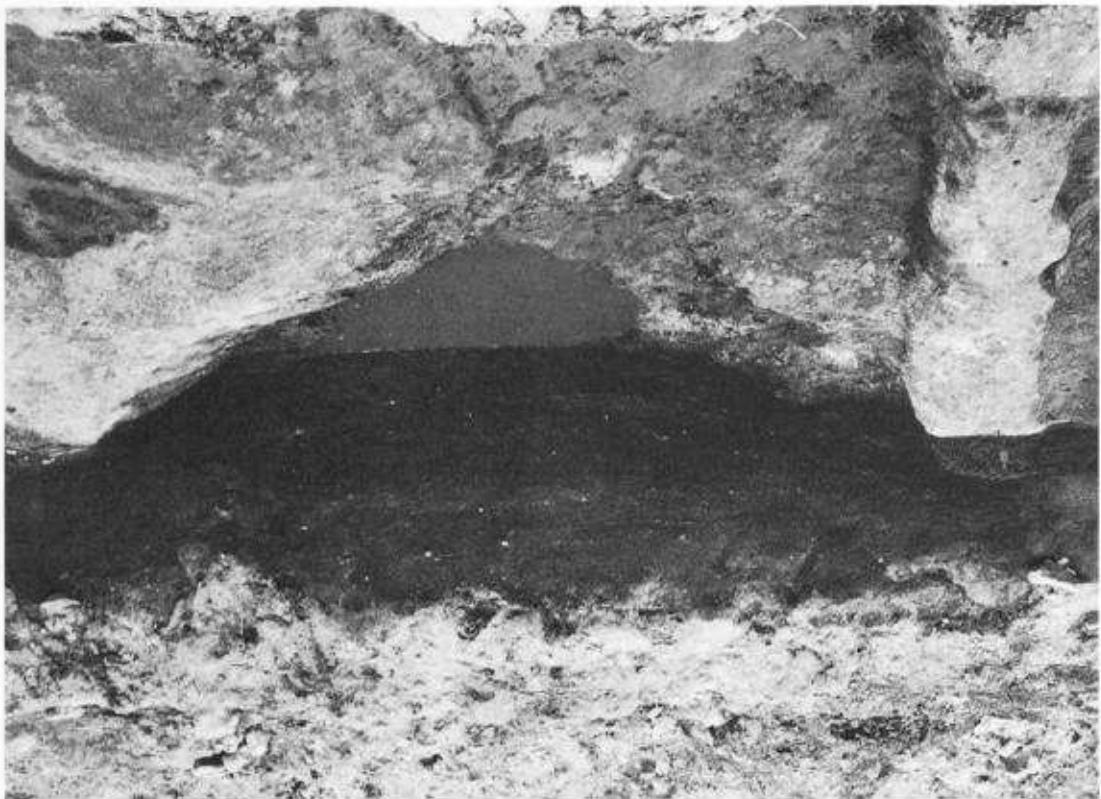


溝内遺物出土状態（北より）



同上（南より）

嫡子显



四壁内土器出土状態





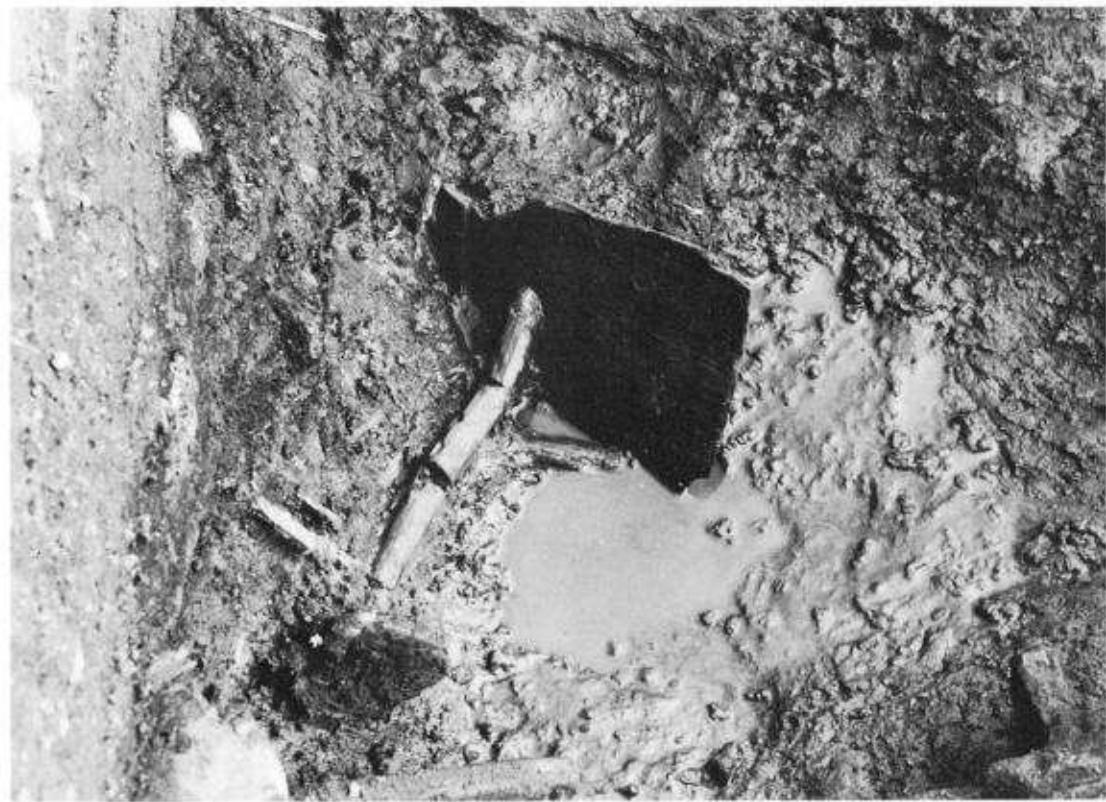
東土壙遺物出土状態（西より）



東土壙全景（南より）



東土壤木製品出土狀態



同上



馬場ワキ地区出土深鉢（縄文式土器）



馬場ワキ地区出土壺棺

## 經向遺跡

昭和56年度遺跡範囲確認発掘調査概報

昭和57年3月印刷

昭和57年3月発行

発行 奈良県桜井市教育委員会  
奈良県桜井市大字粟殿432-1

編集 桜井市教育委員会事務局  
社会教育課

07444-2-9111

印刷 株式会社 奈良明新社  
奈良市橋本町36番地  
TEL 0742-23-3131